〔 中国陶磁の美展によせて〕

館蔵「赤絵仙姑文壷」の仙姑図像について

胴側部に連弁形の窓を四面設け、一面には東蓮図を、三面には仙姑（女仙）の図を描き出しています。女仙の姿勢や顔の向きからすると、建物内に坐す場面が中央に、霊薬を求める場面が左右に位置することとなり、その構成は、あたかも三幅対の絵画をみるようです。

注意したいのは左右の場面です。木葉衣を着け籠を携え素足で霊薬を求める女仙図像の確立は、早いようで、唐・宋と伝える作品が遺ります。この図像は日本にも伝わっており、邦人の画家も描いています。室町時代に遡る遺品としては、水墨画では興牧の作品（個人、フリーア・ギャラリー分蔵）が、著色画では長野・開善寺所蔵の作品が挙げられます。そして、一般的に、その像主には麻姑という名の女仙があてられています。

麻姑の来歴には諸説があり、一定してはいません。時代を異にして登場する複数の麻姑がおり、うち二人について詳しい伝記が残ります。一人は後漢の桓帝（在位57～75）頃の人物で、道教信者・蔡経宅に、神仙・王方平に呼ばれて降臨します。彼女は18歳ばかりの絶世の美女で、結い上げた髪の残りを腰まで垂らし、この世のものとは思われない奇麗な服を纏っていました。爪が鳥の様に長く、また、王方平に「東海が三度桑田に変わったのを目撃しました」と500年ぶりの再会の挨拶をします。背中を掻く道具「まごの手」、慣用句「滄桑の変」はそれに由来します。もう一人は後趙の石勒（在位319～333）頃の人物で、麻秋の娘の麻姑です。彼女は父親の鶏が鳴くまで休ませない労働者酷使に反発し、鳴き声をつくって本物の鶏が鳴くのを誘います。それが発覚し、怒る父親の元から山中に逃れ入り、道を修めて石橋から昇仙します。そして、今日の日本では、こちらの麻姑の山中修行の様子が先程の図像と解釈されています。

しかし、中国での信仰を顧みると、それには疑問が生じます。江西省撫州地方には麻姑山と呼ばれる一山があり、山頂の古壇は麻姑が得道して昇仙したところとする伝承がありました。書の大家・顔真卿が771年にその石碑の銘を書しており、「麻姑仙壇記」として拓本が今に遺ります。その文面は後漢の麻姑を祠っていたことを伝えます。現在でも、麻姑は長寿を司る寿仙として広く信仰を集めています。それは、「滄桑の変」を三度経験するほど後漢の麻姑が長寿であったことに由来しましょう。また、詩文でも麻姑は度々詠まれていますが、大方後漢の麻姑のイメージを反映し、長寿や爪に触れています。従って、巷間への浸透度の圧倒的な高さからすると、図像化され得るのは、後漢の麻姑を措いて他はあり得なくなります。

日本でも、実際に画題となっていたのは後漢の麻姑であったようで、特に近世ではそれが明らかです。画題を記した狩野一渓（1599～1662）の『後素集』には「王方平迎麻姑図」が見え、同じく林羅山（1583～1657）の『後素説』の「麻姑」は『有像列仙伝』より蔡経宅を訪なった説話を引いています。池大雅（1723～76）は「麻姑仙壇記」に取材した作品を描き、富岡鉄斎も1923年に『仙仏奇踪』を基に後漢の麻姑を描いています。

一方、後趙の麻姑は図像化されるまでの支持を集めてはいません。先程の図像を後趙の麻姑とすることは、義勇伝的な説話を尊ぶ近代日本で生まれた解釈のようです。

ただし、後趙のではないにしろ、像主を麻姑とすることは一概には誤りとは言えません。

早くは、菅原道真（837～903）が「…桂父遊隋尚薬尋、麻姑採助宮人喜…」（「九日侍宴、同賦仙潭菊、各分一字、応製」『菅家文集』巻四）と詠み、降って、禅僧の江西龍派（1375～1446）も「吹却麻姑両鬢霜、半匙紅雪奪胎香、天将此薬付吾相、金昇調元国脈長」（「却老丹」『続翠詩藁』食服）と詠んでおり、麻姑と霊薬とが結びついていたことが知られます。ともに日本人の作ですが、中国文学の波響とみられましょう。この結びつきは、信仰の状況を勘案すると、やはり後漢の麻姑の長寿に端を発していましょう。また、明時代（1368～1644）の画譜『唐詩七言』は、『三体詩』より顧侃の詩「水辺楊柳赤欄橋、洞裏神仙碧玉簫、近得麻姑書信否、潯陽江上不通潮」（「薬道士山房」）を採り、麻姑は先程の図像に類する姿で描かれています。更に、清時代の乾隆帝（在位1736～95）の頃に至ると、霊薬の入った籠を掛けた鋤を担ぐ女仙といえば後漢の麻姑とされていたことが、故宮の蔵品目録『秘殿珠林』から知られます。

しかし、先程の図像を単純に等しく麻姑とすることは出来ません。詩文を繙くと、霊薬を求めることは必ずしも特定の仙人と結びついていたわけではなく、それだけで独立した題材となっており、重要な関心事であったことが分かります。それは画題でも同じでしょう。先程の図像は、元々は必ずしも特定の女仙の名を冠するものではなく、女仙や女道士一般が霊薬を求める姿であり、麻姑はその姿で表され得た一人に過ぎません。麻姑とするには、明らかな身体的な特徴や言説の史的展開面からの支持など、更なる条件が必要です。

さて、「赤絵仙姑文壷」の場合、中央の女仙が主役でしょうから、明時代初頭の「人物堆朱稜花盆」のように、中央の女仙へ奉る霊薬を左右の女仙が集める様子、「献寿」、と捉えるのが妥当かと思われます。

（澤田和人）

赤絵仙姑文壷（部分） 磁州窯　元時代後期　大和文華館

人物堆朱稜花盆（部分）

季刊 美のたより No.126
平成11年2月18日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.